

いのちの水

二〇一五年 四月号 第六五〇号

知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる。

(1コリント8の1より)

目次

・復活の春と啓示	1
・復活の重要性について	2
・「永遠の平和のために」 —カント著より	6
・ことば	8
・お知らせ	10

復活の春と啓示

四月、日本は至るところで春の息吹を感じさせる季節となった。枯れたようになっていた木々も、初々しい新芽を見せ、野草たちも可憐な花を咲かせている。

そして、小鳥たちも元気に歌い、蝶や蜂なども飛び交うようになる。

そのように創造主の復活の力を感じさせるような自然に囲まれていながら、日本では復活をさせる神を信じる人はごく少ない。

どんなにうるわしい春の姿を目で見ても、だからといってそうした目で見ただけでは死者をも復活をさせる神を信じることはできない。

主イエスの弟子たちは、キリ

ストの生前の奇跡を数々みてきたがそれでもイエスの復活を信じることはできなかった。死者を生かす神、永遠の命を与える神をはつきりと実感し

受け入れることは、単に見た頭で考えたり、あるいは教えられたり、知識を積み上げてもできることではない。

また、老年になつたからといって必ずしも、真理の感覚が鋭くなるとはいえない。かえって、真理への感覚を失つて、世の中とはこんなものだ、と開き直り、真実や無差別的な愛、敵対する者への愛なども

そんなものは理想論だ、現実にはあり得ないなどと思うようにもなっていくことも多い。そこには啓示が必要である。

神からの啓示があれば、いかに目で見ることができなくとも、

なお信じ、復活させる神を受け入れることができる。

弟子たちが本当にキリストの復活を実感し、確信することができたのは、聖霊が与えられたことによつてであつた。それによつて命がけで、キリストの復活を宣べ伝えるようになったからである。

：聖霊が、あなた方にすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

：真理の霊が来ると、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる。(ヨハネ福音書14の26、16の13)

啓示が与えられることによつて、いかに目で見ることがなくとも、深い真理の実感が与えられ、復活も信じる事ができるようになる。

パウロは、キリスト者となる前は、特別に旧約聖書につい



て専門的に学んだ人であった。

彼は、キリスト者の殉教という目を見はるようなことに接しても、またキリスト者たちの話しをも聞いていたであろうが、復活したキリストを信じるようにはならなかっただけでなく、キリストそのものを全く信じることはできなかった。

しかし、キリスト教徒を迫害するために外国まで出向いていく途中で、復活したキリストの光を受け、そのキリストの言葉をも受けて信じるようになった。これも直接の啓示を受けたゆえに信じることができるようになったのである。

神からの直接的な示し—啓示は、聖書に記されている預言者のよう特別な人だけでなく、ただキリストを信じるだけで与えられる。

キリスト者は、日々新たにされていくと記されている。それは日々、程度の差はあっても、何らかの新たなことが啓示されていくということでもある。

そして、一度受けた啓示であつても日々霊的に目を覚ましていなければ、そこから落ちていくことがある。ペテロのような人物さえそのようなことがあつたと記されている。

(ガラテヤ書2の11〜14)
そのためにこそ、主イエスはたえず目を覚ましていなさいと教えられた。

…誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈つていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。

(マルコ14の38)
新約聖書のほかの箇所でも次のように繰り返し返すこのことが言われている。

…従つて、ほかの人々のように眠つていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。

(1テサロニケ5の6)
…身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回つ

ています。(1ペテロ5の8)



復活の重要性について

私たちにとって、最も大切なことは—と問われると、どのようか。多くの人は、まず健康、と答える。健康

第一という言葉もよく耳にする。健康を失い、病気がなつたら、苦しみ、痛み、不安が伴う、ひどくなる仕事もできなくなる。

そして家族や職場の同僚たちにも負担や迷惑をかける。ひどくなれば、苦痛はますます強まり、自宅での療養、さら

に入院となれば、ベッドの上での苦しみと一人戦わねばならない。そして行き着く先は死である。

このようなことは、子供でも、また悪人と言われる人でもだれでもわかるために、健康第一ということとは広く実感をもつて受けとられている。

他方、その一番大切なはずの健康があつても、よき心がなかったら、その元気な体をもつて悪しきことをすることも多い。大きな犯罪は、みなからだ健康な人間がやっている。また大規模な殺人である戦争をはじめた、推進していくのもみな健康な人間であつて、病院で病気と戦う苦しみにある人ではない。

先日ドイツの飛行機を墜落させてたたくさんの人を死に至らせた人物も体は健康であつた。しかし、心は健康でなかったと言われている。

このように、体がいくら健康であつても、心の健康とは結びつかないことはいくらでも見ら

れる。

そして私たちも体が健康であっても、精神的な苦しみのゆえに生きていけなくなるということは、昔からいくらでもある。

人間と動物の決定的な違い—それはこのような精神的な苦しみや心の悩みを持つことである。

それゆえに、もっとも大切な問題をあつかっている聖書では、心の問題を一貫して第一としている。

心が強くあれば、病気の苦しみにも耐えていくことができるとし、この世の誘惑にも負けないで生きられる。

その心が強くされるために、どういう道があるのか。

弱さの根源—それは人間にはどうしても正しい道を歩けないということである。自分中心、自分の感情あるいは欲望中心になる、ほかの人間に気に入られない、自分が持っているものを自慢する、弱いも

のを見下す：すべてこれらはひと言でいえば、愛がないということである。正しいことへの愛が乏しいゆえに、間違っただことをしたり、言ったりしてしまう。他者への愛がないゆえに、相手の心を傷つけたり、見下したりする言動をしてしまう。

そのような心の状態を罪と言っている。その罪をどうしたらなくすることができるだろうか。それこそ根本問題であり、その解決ができたら—というのが心の問題を少し深く考えるようになった人はだれでも思い悩む。

そして聖書はそのことをまさに中心に据えて記されている。救いとは罪からの救いである。そしてそのために、キリストが来てくださった。十字架で釘づけられるという想像もできない苦しみを負って私たちの罪を身代わりに負ってくださった。

そのことをただ信じるだけで、

赦しを感じるができる。

キリスト教の福音—喜びの知らせ—とはその罪の赦しの知らせだった。赦しなくば、自分の罪はどうすることもできない。

その罪の赦しの福音をもたらすために不可欠であったのが復活である。

復活がなく、ただ十字架で処刑されただけなら、それが万人の罪を背負って死んだなどとは言えない。それはただの人間だからである。

神の力で復活し、さらに聖霊となつて世界全体の無数の人たちのうちに宿り、導くようになった。

復活があったからこそ、人間ではない。神と同じ本性のお方であることがはっきりと示された。だからこそ、万人の罪をも赦し、さらにその赦しとともに神の力そのものである、聖霊をその程度はさまざまであるが与えてくださるようになった。

普通の人間なら、殺されたらそれでもう何もできない。万事休すである。

イエスが復活した！これはイエスに対する見方の根本的な転換となった。

死をも超える神の力があるのだ、しかもそれは愛と真実、そして正義に満ちた力だと弟子たちは示された。

無惨にも嘲られ、ついにわが神、わが神、どうして私を捨てたのか！との叫びをあげて死んでしまっただけなら、そこには絶望があるだけである。

キリストの復活がなかったら、いかに完全な愛や奇跡を起こす力があつて権威ある言葉を語つてもなお、悪の力により、死の力によつて滅ぼされたということになる。

キリストの復活があったからこそ、あらゆる悪にも勝利したのだという確信が与えられた。そしてその確信が、イエスの復活を見ていない人たちが

にも、イエスの復活を信じるだけで与えられるようになった。それは復活のイエスの別の現れである聖霊の働きによる。

その確信を持続させ、罪を犯してもなお、十字架のキリストを仰ぐだけで、罪の赦しを実感して立ち上がることができ

る。それゆえに、弟子たちの最初の福音宣教は、きわめて単純であった。それはイエスは復活した！であった。

神はイエスを復活させた。それは、人々を悔い改めさせ、その罪を赦すために、イエスを導き手とし、救い主として復活させ、神の右に上げた。

(使徒言行録5の30〜31)

イエスは神と同じ存在となつて、いまも導き、罪の赦しを与える存在となつた。

このように、十字架による罪の赦しということも、復活がなかったらあり得ないことであつた。

それゆえに、パウロは次のように言った。

：キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のあ

る者が、死者の復活などない、と言っているのはなぜか。

キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄である。

キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなし

く、あなたがたは今もなお罪の中にある。この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人

の中で最も惨めな者となる。しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りにつ

いた人たちの初穂となられた。(1コリント15の12〜19より)

はイエスも人間であつた、死にうち勝つ力は与えられていなかったということであり、そのような人間が万人の罪からの救いなどを与えることはできない。

それゆえに、復活抜きでイエスを信じるというのは空しい、力なきものとなる。

復活がないのなら、聖霊もない。聖霊とは復活のキリストにほかならないからである。

復活のキリスト―それは死の力に勝利する力であるゆえに、最も重要な存在である。死の力にうち勝つほどの力が、復活を信じる人に与えられるのであるから、復活がなかったらあり得ないことであつた。

私たちのどうにもならない罪の本性―それは死んでいたい

われている状況ですらも、それにうち勝つようにと導いてくださる。

：さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死

んでいた。しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、

罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――あなたがたの救われたのは恵みによる――キリスト・

イエスによつて共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださった。

事実、あなたがたは、恵みにより、信仰により救われた。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物である。(エフェソの信徒への手紙 2章1節〜8節より)

このように、私たちは心の深いところ―真実や愛、正しさ、清さという点にまで神のそうした完全な真実や愛などの前

には、まったく不信実で愛なきものにすぎない。学問や芸術、スポーツ、等々がどんな

にできてもおこなうした心状態は変ることがない。

それをキリストは、復活のキリストとともに私たちをも復活させてくださった。復活させてくださったということは、聖霊をくださったということと同じである。

天の王座に着かせてくださったというのにはあまりにも大きすぎて実感できないほどである。

天の王座とは神の座であり、そこに着かせてくださったとは、神の力をくださったという事である。その程度には実に大きな違いがあるが、ともかくも神の御座に座らせていただいたということはその神の無尽蔵の力のいくらかでもいただいているということである。

パウロも、自分のこの死のからだを何が救ってくれるのか、それこそキリストであると述べている。

：私はなんとみじめな人間なのか。死に定められたこの体から誰が私を救ってくれるのか。(ローマ書7の24)

そして、創世記の最初に記されている闇と混沌―それは死の世界であり、絶望の状態である。しかし、そこに神の言葉によって光が存在するようになったという事―それは死からの勝利、復活を指し示すものである。

キリストの復活がなかったら、私たちの信仰は空しいものとなり、罪の赦しという最も大切なこともなくなる。復活抜きキリスト教を伝えることも無駄となる。

このように、キリスト教信仰においては、復活がないのならすべては無になるというほどに重要なものである。

もう一つ、パウロが力を込めて、それがなかったら無であるといっているもの―それが「愛」である。

どんな学者であつても、また巧みな話しをしても、さらに人のためにわが身を焼くほどの行為であつてもなお、愛がないことがありうるという。

ここでいう愛とは、通常よく言われる男女や親子の愛でなく、

無差別的な神の愛を言う。

：たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようと、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようと、愛がなければ、無に等しい。

全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。(1コリント13の3、4)

キリストの復活がなかったのなら、すべては無意味になるとともに、愛がなかったら、無に等しいという。

復活と神の愛は結びついていからである。神はキリストを復活させた。それは全人類に、死の力に勝利する力を与えようとの愛の御心からだった。死とは闇であり、文字通りの絶望の世界である。しかし、復活とはそうした闇にある人たちを新たにする力を世界に示した出来事だった。

復活がないということは、死によってみな滅びてしまうという事で、死の苦しみにある人たちはそのまま永遠に闇に沈んでしまうことになる。

愛とは、そうした死の闇から救いだす力である。

復活とは、すでに述べたように、罪に汚れて死んだ状態にあった私たちが、その罪赦されて新たにされた状態についても言われている。(エペソ書2の1、8)

そして、この肉体の死後に、キリストの栄光の姿、霊のからだに復活させていただけることが、本来の復活という意味で記されている。

：キリストは、万物を支配下に置くこととさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる。

(フィリピ書3の21)

さらに、復活は、この世界全体、宇宙そのものが新しくされ

ることにつながっている。これもある種の復活である。新しい天と地へと復活するのである。

主イエスは言われた、「天地は滅びる。」(*)

しかし私の言葉は決して滅びない。(マタイ24の36)

(*)「滅びる」と訳されている原語は、パレルコマイ *parerchomai* であり、*para* (側)と *erchomai* (行く) から成る言葉であり、「過ぎ去る」*pass away* と訳される。

この言葉は、マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書に共通して記されている。それほど重要とされたのである。
この永遠とみえる宇宙、天地さえ滅びるもの、過ぎ去っていくものと言われている。しかしそれが根本的に変えられ、新しい天と地となると約束されているのである。いかなる滅びの力、死の力が迫って来ようとも、それらすべてに勝利して新たな天と地となって復活する——ということなのである。

ある。

その新しい天と地の世界には、現在のような太陽も必要でなくなる。神とキリストが太陽となるからである。(黙示録21の23、22の5)

私たちの復活においても、この肉体は必要でなくなる。それはキリストのような霊のからだを与えられるからであり、キリストの栄光の姿と変えられるからである。

：自然の命の体として蒔かれ、霊の体に復活する。：自然の命の体があり、次いで霊の体がある。(1コリント15の44、45より)

このように、古く滅びてしまいうようなもの、実際に死んでしまったものさえも新しい命を与えると、この復活の真理は、聖書全体において記されている。旧約聖書ではとくに詩篇やヨブ記、イザヤ書、ダニエル書など部分的であるがそれ

でも、この復活の真理は予告されている。

この復活の真理をキリストは一言で語られた。

：イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。

生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」(ヨハネ11の25、26)

「永遠の平和のために」カント著より

政治は、「正(正義)なり」と二千五百年ほど昔の中国の哲学者(孔子)が語ったことは前月号で述べた。

今から三百年ちかく昔に生まれた哲学者カントは、「正」と通い合う意味をもっている「誠実」ということの重要性を次のように述べている。

「誠実は、いかなる政治にも

まさる」——これは、どのような異論をも超越しているものであり、それどころか、政治の避けて通れない条件なのである。(カント著「永遠の平和のために」)

Ehrlichkeit ist besser denn alle Politik, über allen Einwurf unendlich erhaben, ja die unumgängliche Bedingung der letzteren.

(Kant: Zum ewigen Frieden 45)

「)のように、正しさや誠実、正直といった一人の人間において重要なことは、人間の集団においても同じようにその重要性は変ることがないのを示している。

他者に対して誠実、正しくあらうとして、他者を殺すなどということはありません。

しかし、人間の集団となったとき、そのような人間の命を奪うという行為(戦争)を大々的に行なうてしかもそれを正義の戦争だとか聖戦だと主張することが行なわれてきた。そのようなことは大きな間違

いであることは、本来誰しも感じるはずのことである。

また、自分の国の平和と安全のためと称して軍備の増強をするということは、昔からなされてきたし、現在の日本でも、不可欠のように言われている。中国もさらに軍事力を増強し、日本においても、防衛費は増額を重ねている。そのため、莫大な経費が投入されている。

しかし、このような考え方は、歴史的にみても、本当の平和に至ることはなく、かえって徐々に平和の破壊の準備ともなってきた。(*)

(*) 例えば、歴史上最初の世界大戦となった第一次世界大戦への道を作ったのも、軍事力を増大させるという各国の方針であった。1898年、ドイツは、海軍の軍備拡張をすすめる海軍法を制定し、その後ドイツは軍艦を次々と建造していった。このような状況に接して、イギリスも軍艦を増強しはじめ、軍艦の建造の競争という状況となった。そして周辺

の国々も軍備を拡張していき、第一次世界大戦への導火線となった。

また、第二次世界大戦がはじまる前段階として、ドイツと周辺の国々の軍拡競争が次第に激しくなり、日本とアメリカにおいても、戦艦や空母の建造でより優位に立とうとする軍拡競争がなされていた。第二次世界大戦はそうした延長上に生じている。

このような軍備の増強、拡大は決して本当の平和へと結びつかないことは、昔から言われていた。

先ほど引用したカントは同じ著作で、次のように書いている。

：常備軍は、時とともに全廃されるべきである。

なぜなら、常備軍はいつでも戦えるよう、すでに十分戦備を整えているので、ほかの国に戦争の不安を感じさせるからである。

そのために他国を刺激して、おたがいにかぎりのない戦備の拡張によって他国の優位に

立とうと努めさせることになる。(前述書第一章3より)

国を守るためには軍備増強は不可欠なことだと考えられていた時代に、このような軍備は全面的に撤廃されるべきだという考えが明確に主張されている。

これは、キリストの次の言葉の延長上にあるのがうかがえる。

：イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。(マタイ福音書26の52)

剣―現代でいえば、軍備を

もって平和を獲得するのだというものは、軍備が起こした戦争によってそのような思想が間違いであることを示されてきたし、最終的にそうした武力の行使たる戦争によってあるいはそうした考え方そのものによって滅びてしまう。

このことは、核兵器の増強がなされてきた現代にあつてはさらに重要である。

二千年前に、真理の言葉として言われたイエスの言葉は、今日ますますその重要性が浮かび上がっている。

憲法9条こそは、軍拡競争によって破滅に至るほかにないということをおびただしい犠牲によって知らされた結果生まれたものであり、そのはるか源流にキリストの言葉があり、さらにキリスト以前700年ほど昔の預言者イザヤが受けたつぎの啓示にすでにみられるほど、長い歴史をもっている。

：主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かつて剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。(イザヤ書2の4〜5)

それは神のご意志である。

人間のうつりゆく考えにすぎない言葉が、あたかも真理であるように言われるときこそ、永遠に変わらない真理のみ言葉の重要性が浮かび上がってくる。

現在の沖縄の基地問題も、結局は、軍備を重要とするゆえに、アメリカの軍事的要請を受け入れ、沖縄に圧倒的な基地を置いたままとなっている。日本の政府は、集団的自衛権を行使してアメリカの軍備の肩代わりをしていく方向にあるゆえに、沖縄からアメリカの基地をなくするという方向に進まない。

軍備によっては本当には守られることはないのは歴史を振り返れば明らかなことである。自国、国外を問わず、真実を重んじる姿勢、誠実さや弱者に手を差し伸べるといった精神こそ、真に国、国民を守る道である。

安倍政権は、地方を重視、地方創生といいながら、沖縄と

いう地方の県民の切実な声を本気で聞こうとせず、権力と金の力で押しつけようとするのは、原発にかかわることでも同様であった。

沖縄県で、知事選、那覇市長選などで、ともに自民党が支援する候補が敗北したということ、これほど明確な地方の意思表示はないにもかかわらず、それをくみ取ろうとせず、それをくみ取ろうとせず、無視して進もうとする姿勢に政治の貧困と精神の貧困を思わせるものがある。

主の光の中を歩もう。これは、現代の私たちキリスト者に向けて呼びかけられている言葉でもある。この世の光のように見えるものでなく、永遠の主の光の中を歩むことこそ私たちに求められていることば

(383) 何か善きこと

あなたは、出会う人ごとに、何か善いことがあるようにと

願っているか。

もしそうならば、あなたは人間らしい人であり、思いやりのある心の持ち主であるが、そうでなければあなたの言葉はただ口先だけのおしゃべりである。(ヒルテイ著「眠られぬ夜のために」第2部 6月5日より)

・何か善いこと—Something Goodを常に誰に対してでも祈り、願うこと、そのようなことは以前には考えたこともなかったが、聖書の世界を知ることが、遠い昔からじつさいにそのように、生きていく人たちがいることを知らされて驚かされた。

マザー・テレサも「何か美しいもの」Something Beautifulを—と言っている。そのタイトルの本も出版されている。

神は私たちに、つねに、Something Good として、Something Beautiful を、自然を通して、またさまざまの人間を通して、私たちに提供し

続けておられる。

(384)

あなた方は、しばしば「与えてもよい。しかし、それに値する者にだけ」と言う。

しかし、あなた方の果樹園の樹々は、そうは言わない。(「預言者」カール・ギブラン)

・神が創造された自然—山野に咲く野草の花々、樹木のたえずまい、またここに言われている果樹、そして青く澄んだ空や美しい山々や川、海などの景観—それらはすべての人たちに提供されている。

だれでも自由にそこからその清さや美、あるいは力などをくみ取れるようにされている。人間はいつも限界を定めようとするが、神の愛は無差別的である。私たちが心を開けば開くほど、また霊の目が開かれるほど、年齢や学問の有無、職業などにかかわらず与えられるようになっていく。

(385)

聖書について批判的であるな。聖書をしてあなたを批判し、裁かせよ。

Don't be critical of the Bible
Let the Bible criticize and judge
you.

・聖書について批判的である、キリスト者でなければ、キリスト者となつても、この部分は誰が書いた、本当の著者は〇〇である等々、いろいろと注解書を読んで批判的に読む人たちもいる。そうした知識も時に必要な時もあるが、そのように読むことに力を入れていると、いつのまにか聖書の相当部分が人間的なものだと思ふようになり、聖書の一部だけが神の言葉であるように思つてしまふ—というこゝともなにかねない。そして、神の言葉としての力がそこから受けられなくなつていくこ

とがある。

聖書を全体として聖霊によつて導かれ、そして記された「神の言葉」であると信じて受けとるとき、それは批判すべき本でなく、まず、私たちが限りなく尊重すべき書であることがわかつてくる。

聖書は私たちの数々の間違いを指摘してくれるだけでなく、その間違い(罪)を赦してくださる道を示し、さらにその道を歩んでいく力もこの書には秘められている。

その中の言葉は、現代に生きてはたらく真理だとわかつてくる。

キリストを人間だ、過去の偉大な人物の一人だと見れば、ほとんど現代の私たちに力を持たない。

しかし、キリストはいまも生きて働いておられる神だと信じ、実感するとき、日々の私たちに比類のない存在となつてくるのと同様である。

編集だより

今月は、予想外のことでも生じて、書き上げる時間がなく、つもより少ない頁数となっています。

イースター(復活節)は、4月5日であり、春という季節そのものがとくに日本では、復活の命を日々感じさせるときでもありますので、今月は復活に関して書きました。

日々新たに生まれ、死後はどのように復活させていただけるということ、さらにキリストの再臨によつて新しい天と地となる希望が与えられているということとは、かけがえない恵みです。

来信より

〇「いのちの水」誌3月号にて、「政」(政治)とは「正」なり、を読み、まさしくそのとおりと思ひました。

約40年余り前私はアメリカへ留学していました、アメリカで生活していると、

様々な場所、南北戦争(Civil War)という歴史的大事件が様々な場所によく解説あるいは説明されていて目につきます。：

ワシントンの国会議事堂の前の長い公園を挟んで、約2百程先の向かい側に大理石のリンカーン記念堂があり、大きなリンカーンの座像が遠く向かいの国会を見据えていました。台座には亡くなる半月前の第二次大統領就任演説の全文が彫りつけてありました。永久保存なのでしよう。

リンカーンはその演説で「南北戦争は他人が額に汗して得たものを、無償で奪い取ること(奴隷制度)を長いこと続けてきた悪行に対する神の罰である」と言い切っています。

リンカーンの死後、政治的、形式的奴隷制度は無くなりましたが、残念なことに生前のリンカーン大統領が目指していた経済的平等(真の実質的平等)達成の政治活動は今だに全く効を奏さないばかりか、年々貧富の巨大な格差がますますひどくなつてそれが世界

人類にも影響して大きな不和と争いを引き起こし始めています。

私はアメリカにいた時から、人々に今も大きな強いインパクトを与え続けている南北戦争や国会を見据えているあのリンカーンの彫像はアメリカの社会に一体どういう意味を問いかけているのだろうかと考え続けました。でも自分を納得できる答えは出てきませんでした。

さらにこの疑問を日本へ帰国後も私は解答を求めて長く考え続けました。約10年ほど経過した時にある時ふと考えついた答えは、「政治には絶対には正しい道義が必要である、政治は正しいものでなければならぬ。」ということをおアメリカでは南北戦争という世界的な大事件を通じて、あるいはリンカーン大統領の信念を通して、人民のための政治の有るべき姿を人々や子孫に思い

起こさせているに違い無いということでした。

”政治とは「正」なり”を拝読して、このことを思い出しました。(九州の方)

○「ヨハネによる福音書」の講話(*)を聴かせていただいています。

ていねいに説明して下さるので、イエスさまのそば近くに、その時代その場所にいるようなみことばが近くに感じられ、喜びに満たされ楽しみにしています。(四国の方)

(*)吉村孝雄による聖書講話CDシリーズ(MP3)。CD5枚セットで販売しています。(価格は二千五百円)

インターネットでの徳島聖書キリスト集会のホームページでも聞くことができます。(無料)

お知らせ

○第42回 キリスト教 無教会 四国集会

- ・ 主題: 「復活の命」
- ・ 日時: 5月16日(土) 17日(日) 12時。
- ・ 会場: 道後 友輪荘
- ・ 会費: 全日参加 九千円。
- ・ (一泊二食、写真代金含む)
- ・ 部分参加等 問い合わせ
- ・ 小笠原明

089-970-7505

講演会

○キリスト教独立伝道会主催

- ・ 日時 4月29日(水・祝日)
- ・ 会場 Y M C A アジア青少年センター3階(東京都千代田区猿樂町2の5の5)
- ・ 記念講演 15時〜16時
- ・ 講師: 吉村孝雄

「神の言葉―その光、命、力」
懇談 16時〜17時

・ 連絡先 多田義国、電話 0427-396-0975
・ 会費 無料

徳島聖書キリスト集会案内

- ・ 場所は、徳島市南田宮一丁目一の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。
- 徳島聖書キリスト集会場での礼拝 集会
- (一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分〜
- (二) 夕拝 第一火曜、第三火曜、夜7時30分から。毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、毎月、徳島市国府町のいのちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中山宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅を移動)
- ・ 土曜日集会: 第四土曜日の午後二時〜。手話と植物、聖書の会、
- ・ 水曜集会: 第二水曜午後一時から。
- 集会場以外での家庭集会など。
- ・ 北島集会: 板野郡北島町の戸川宅(第二、第四の月曜日午後一時よりと第二水曜日夜七時三十分より)
- ・ 海陽集会、海部郡海陽町の讚美堂・数度宅(第二火曜日午前十時より)、
- ・ 天宝堂集会: 徳島市応神町の天宝堂での集会(網野宅) 毎月第二金曜日午後8時〜。小羊集会: 徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院での集会。毎月第一月曜午後3時〜。いのちのさと集会: 徳島市国府町(毎月第一、第三水曜日午後七時三十分より「いのちのさと」作業所)、
- ・ 藍住集会: 第二月曜日の午前10時より板野郡藍住町美容サロン・ルカ(笠原宅)、
- ・ つゆ草集会: 毎月一度、徳島大学病院8階個室での集会。・ 祈祷会は月1度(第一金曜日午前10時)。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 050-1163-4962 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)
郵便振替口座 〇一六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。
(これらは、いずれも郵便局で扱えます。) E-mail: pistist7ty@hotmail.com http://pistis.jp FAX 0885-32-3017